

共生社会の形成に向けた保育・教育の希求（4）

—「つながり」の中でその子らしく過ごす姿やそれを可能にする実践から学ぶ—

企画・司会者 広瀬由紀（植草学園大学）
話題提供者 鶴巻直子（葛飾こどもの園幼稚園）
鈴木由歌（愛隣幼稚園）
若月芳浩（四季の森幼稚園・玉川大学）
指定討論者 守 巧（こども教育宝仙大学）
久保山茂樹（国立特別支援教育総合研究所）
KEY WORDS: インクルーシブな保育・教育 共生社会

【企画趣旨】

我が国が 2014 年に批准した障害者権利条約は、共生社会を志向している。筆者らは、一連のシンポジウムでインクルーシブな保育を行う異議と可能性を問い、保育者がサポーターとして機能するための議論を重ね、実践の方向性について検討してきた。議論の中で、共生社会の形成に向けた保育・教育を展開する上で、さまざまな「つながり」が重要であるとの示唆を得た。本シンポジウムでは、さまざまな「つながり」の中でその子らしく過ごす姿や、そこでの周囲の子の様相を通して「互いに尊重し合える関係」について考えたい。また、そうした子どもたちの姿を引き出す実践上の配慮や工夫を通し、共生社会の形成に向けた保育・教育の実践の鍵とは何かについても議論したい。

話題提供：「集団において『その子に向き合うこと』の意味
鶴巻直子

私たちは、子ども達のありのままを受け止めたいと思いつつも、クラス運営との狭間で常に葛藤しもどかしさを感じている。このことから日々の保育の中で時間をかけ“その子自身をよく知る”事から今必要な保育が作られていくと考えている。

当園では、クラス集団活動時であっても、遊びや生活の中で個別に対話をしながら関わり、その子の背景や興味関心、小さな思いを知る事を大切にしている。それは、担任だけではなく、園に関わる全ての保育者、職員、家庭も含め、色々な情報が絡み合い多角的に捉える事で、幅の広い“個を知る”に繋がってゆく。そして、日常的に繰り返される保育にその子を合わせようとするのではなく“その子のありのままの姿”を活かした遊びや活動を作り出し、「自分は受け入れられている、認められている」という自己肯定の上に、自分から動き学び出す保育が作られていくと考える。

話題提供：「子どもどうしが『互いを尊重し合える』関係」
鈴木由歌

年少の頃、子どもたちは個々のあそびに夢中になって過ごす。隣で過ごす子が居ても、一緒に遊んだという意識は薄い。そして年中になると、あそびを通じた関わりの中で“一緒”を意識し“違い”にも気づくようになる。楽しい子、気の合う子との関係は深まり、仲間と思うようになる。一方で、何か違う子、嫌なことをする子、不思議な子とは距離をおき、関わろうとしなくなり、時に排除も起こる。しかし、子どもたちの関係は更に変化していく。子どもたちの自由で主体的なあそびや生活は、多面的な出会いにつながっていく。自分とは違う子の気付かなかった一面に出会い、気持ちが通じ合う心地よさを知る。自分も仲間も違っていていいと安心する時に、「互いを尊重し合える」関係が生まれる。そこには排除に終わらない仲間づくりを目指し、子どもたちを折々に支える保育者の働きも大きい。

話題提供：「保育のあり方についての歴史的つながりを超えて」若月芳浩

障害のある子どもを含むインクルーシブな保育の実現に向けて保育のあり方を検討し、深めていくといくつかの障壁に出会う。それは保育形態や理念における日本文化の伝統的な保育のあり方である。高度経済成長の時代に設置認可が増大した私立幼稚園は、元来定型発達の幼児に「何を経験させるか」を中心に保育が展開されるのが一般化した。

しかし、子ども主体の保育の重要性は常に根底に流れており、その文化が定着している園は、障害の有無に左右される事なく、質の高い保育が維持されているのである。文化や伝統を重んじるあまり、保育のあり方が変更出来ない歴史的なつながりを打破することが障害のある子どもの保育の方向性を定めて行く事を念頭に置き、令和の保育の方向性を障害のある子どもを含む保育として検討したい。

指定討論：「つながりを育む保育を実践する」守巧

インクルーシブという言葉が認知され、保育現場においてこの言葉が浸透しつつある。一方、インクルーシブな保育の実践には工夫が必要となる。例えば、子ども同士の関係性を狭めないために、子どもの障害を全面に出して保育をしない工夫である。また、得意なことなどその子どものポジティブな情報を集めて関わるなど、個性を引き出す工夫も求められる。さらに、発達年齢を問わず、障害がある子どもが安心して過ごせる集団作りへの配慮も必要である。これらの工夫は、実践者である保育者同士が共感を伴いながら共有することが望ましいが、多忙を極める保育現場では限界がある。そこで、保育実践に寄与するために、「つながり」を求める際の実践上の喜びや苦悩、あるいは子どもの「つながり」を支える保育者のインクルーシブ保育への認識について検討したい。

指定討論：「共生社会の手がかりは保育にある」久保山茂樹

特別支援教育は、特別な支援を必要とする子どもに特別の指導をして能力を身につけさせたり、特別な工夫をすることで能力を補ったりしてきた。それは合理的配慮の追求である。子どもたちは確かに暮らしやすくなっただろう。だが、それは結局のところ、言わば少数派の子どもたちを、如何にして多数派の子どもたちに近づけ、集団に合わせさせていくかという目的の下になされていたのではないかと考える。共生社会を希求するためには、むしろ多数派の子どもたちや保育者・教師が、どれだけ少数派の子どもたちの存在を意識して変わっていけるかが問われる。つまり、基礎的環境整備の充実である。そのための手がかりは特別支援教育や療育ではなく、保育実践の中に「保育の質の追求」という取組として豊富に存在する。共生社会の形成に向けて、保育から学び、広めていきたい事柄を共有したい。

(HIROSE Yuki, TSURUMAKI Naoko, SUZUKI Yuka, WAKATSUKI Yoshihiro, MORI Takumi, KUBOYAMA Shigeki)